

「紅毛医言」の“あとがき”について

板野 俊文

香川大学医学部

合田強の「紅毛医言」は「解体新書」の発刊に先立つこと12年前（寶暦12年：1762）に書かれた。「蘭方内科に及ぶ者としては嚆矢である（新撰洋学年表）」として、一部ではよく知られている。これは阿蘭陀通詞の吉雄耕牛の口述を合田強が書き写し、五巻として残した「西洋医術」を、別に1巻にまとめたものである。この合田強の直筆の「西洋医術」の原本は現存するが（香川県立ミュージアム蔵）、「紅毛医言」は写本のみが残っている（鎌田共済会郷土博物館蔵：鎌田本と略）。この鎌田本の元本は呉秀三先生の旧蔵（呉本と略）であったが、これも写本で、現在は、原本と呉本ともに行方不明である。

この鎌田本の巻末に宇田川玄随と大槻文彦の対照的な文章が書かれている。玄随の文に関しては既に、長与健夫先生が言及している（日本医史学雑誌38巻89-101）、一部の紹介とする。「寛政癸丑仲秋二十八日偶嶺春泰氏の病を訪ふ。語次書鹿（ママ）中より一冊子を出して示さる。取って見れば西洋の刺絡法並に薬方を記する者にして 其凡例を読めば（中略）通編奇なることは奇なり 然れとも鹵奔滅裂終る章をなさず（後略）」とある。寛政5年（1793）の10月6日に春泰は亡くなっている、死のほぼ1か月前に玄随は会ったことになる。この出された冊子が「紅毛医言」であった。この前年（1792年）に玄随は、歴史的には「本邦初」とされるヨハネス・ゴルテルのオランダ内科書の翻訳本「西説内科撰要」を刊行している。この酷評には、自分の業績を汚されたような玄随の思いが表れている。しかし、玄随はその日のうちに、この本を筆写したとあることから、一面この本の価値を直ちに理解したとも思われる。いずれにせよこの文章が残されていることから、呉本は嶺春泰から、宇田川玄随の手を経たと確定できる。

一方、大槻文彦の文に関しては今まで報告されていないし、短いので全文を書き写す。

「文學博士大槻文彦君

吉益東洞の門人で讃岐の丸亀の合田強といふ人が長崎に行って阿蘭陀の内科医方を聞いて寶暦十二年に作った紅毛医言といふ書がある。此の書の事は永富独嘯庵の此書の序文ばかり見て知ったのでまだ其本書は見ないが何にせよ阿蘭陀の内科に関係したことを書いたものは此書が第一であらう」

これは、兄の大槻如電の「新撰洋学年表」60ページに書かれた記述と軌を一にする。ただし、如電も「紅毛医言」を見たとは書いていない。どのようにして、大槻兄弟が「紅毛医言」の存在を知ったかは不明である。しかし、文彦の文を書き加えたのは呉先生であらう。按ずるに玄随があまりにひどく「紅毛医言」をこき下ろしたので、何か書かなければならないと思われたであろう。呉先生の思いが伝わってくるような気がする。最終頁に鎌田本は昭和四年十月十日から写しはじめて、二十二日に終わったと書かれている。

「紅毛医言」を評価することと、合田強の業績を評価することは別の事であるが、吉雄耕牛が生前に刊行本を残さなかったことから、当時の蘭方医学を知る上では重要な文献であると思われる。また、現在、これらの写本や他の原本があるのは合田家代々の方々の努力の賜物であり、その交友は富士川游先生（「中外医事新報」1239号）、長与健夫先生（前出）の文に詳しい。今回の発表は、これらの文献と、本文の内容もあわせて紹介する。これらの知見をもとに、「紅毛医言」の価値を再考したい。